

琉球大学学術リポジトリ

人づくりの温床4Hを育てよう ―青少年健全育成
強調月間運動によせて―


メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古謝, 瑞幸, Kojia, Zuiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20871



人づくりの温床 4Hを育てよう

— 青少年健全育成強調月間運動によせて —


人づくりの施策の一環として青少年健全育成強調月間運動が目下行なわれています。これは政府主唱、各種団体協賛の非常に意義深い行事であります。この月間運動を通じて私達は青少年問題に関してよりよく理解し、そして継続的に社会生活の凡ゆる場面にこの心構えを反映したいものです。



人づくりが叫ばれるにつけ、ますます重大性を意識させられるのが4Hクラブです。

義務教育、或いは高校を卒業した青少年のための人づくりの場として最も推奨したいものは4Hクラブです。特に学習の機会に恵まれない農村社会においてこれ程重要で効果的な教育組織はないと信じます。

4Hの目標は国家の尊人的資源——青少年の育成であります。クラブの活動は指導力、責任感、共同精神、自信、技量の養成を重点的に行うが、その中で最も強調されるのは良市民の育成ということです。



1950年に誕生した琉球の4Hクラブもこれまでに多数の農村の中堅指導者を生み出した事は周知の通りです。筆者は本誌4月号の表紙写真と4月2日の沖縄タイムス紙に宮古の4Hの成功物語りを紹介しましたが、これなどは国際的な4Hのレベルに達している実例であります。話の筋は3名の4Hクラブ員が、クラブ活動を通じて修得した知識と技術を結束して酪農に乗出し、目下盛んに叫ばれている近代化農業のトップを切るという事でありました。また、東村の1青年は沖縄代表として全日本4H発表大会で優秀な成績をおさめて大きな話題をよんだのはまだ耳新しいことでもあります。その他にも大浜町、具志頭村、玉城村、勝連村などにも活動的なクラブやメンバーがあって村興しに張切っております。宮古の関係指導者はこの三名の農業青年の誕生で、もう一般の農民に声を枯らして指導する必要がなくなった。直に彼らを見せた方が近道だ

と異口同音に語っておられましたが確かにそうでしょう。彼らは技術的にも文化的にも農村の立派なリーダーであります。人づくり運動の唱える人とはこの様な青年の外の何ものでもない事と信じます。この事実からしましても4Hがいかに人づくりに寄与しているかが解ります。

1908年、時の米国大統領ルーズベルトは米国の農村の発展を阻む要因を究明するために、農村生活研究委員会を任命した。委員会は細密に全国的な実態調査を行い、多くの報告書を提出した。その中で注目すべき事は有望な青年の離農が著しく、また、大学を卒業した者が再び農村に帰って来ないという事実であった。この報告書は1914年、米国の普及事業の母体として有名なスミス・レバー法の国会通過の大きな助力となった。普及事業は青少年教育即ち4Hクラブの育成を大きな目標にかかげた。1914年以来今日に至るまで、4Hは青少年の職業技術、民主的団体行動、良市民としての人格形成の訓練を実施し、国家の施策の一つとして益々重視されるに至った。これこそは強い正義心を通して立派な米国市民を育成した第一歩である。やがて4Hは全米における青少年犯罪問題解決の突破口ともなった。(T・マーチン著・4H指導者のハンドブックから)。この様に米国の4Hは人づくりのための大きな期待がかけられています。現在225万人以上の青少年男女が4Hに登録されています。

韓国の4Hも活動とクラブ員数に関する限り米国に次ぐ優秀さを誇っています。それはどんな僻地の農村に行っても部落入口に建てられた恒久的な4Hのサインを見ても納得がいきます。

また、お隣の台湾もしかり。1959年の統計では62,890人のメンバーに達しているが、現在は遥かにそれを上廻っているとの事でした。



日本の4Hは青少年の就農者が他産業へ流出するために既存の集団まで消滅してゆく傾向にあります。それ故に部落単位から市町村単位のクラブ結成が計画されていますが、範囲が広くなればそれなりに不都合な問題ができて関係者をなやましています。

それでは琉球の4Hはどうなっているのでしょうか。郷土に初めて4Hが誕生したのは1950年。当初はクラブも多く、活動も割に活発でありました。しかし、軍作業、内外の第二次産業へと青少年就農者が地すべりのように流出し、年々消滅した。農業改良課の資料によると現在75のクラブが残っているが、これとて活動しているのは少ないようであります。先に紹介したクラブはこの少ない数に含まれている訳で、結局優秀なものだけが健在という事になります。

韓国、台湾、米国などの4Hが発展している主な原因は国家が人づくりの施策として4Hを育成している事であります。その現れとして普及事業は農業、生活、4Hの三大分野からなり、どちらにも等しくウエイトがおかれています。

明日の農村の指導者、後継者の温床ともいうべき4Hが、ひとり琉球でのみ消滅していく現状は全く残念です。これは社会の責任としてしんげんに検討されるべき問題ではないでしょうか。郷土の4Hを人づくりという見地から考えて、これを継続的に発展せしめる対策として次の事項を提言致します。

1 4H機構の強化

現在農業改良課には有能な4H指導者がおられるので、その機構を強化してもっと巾広い活動をせしめる。それと同時に各普及所に専門的な4H普及員を新設すること。現在は農改や生改の普及員が4Hの育成指導までも担当しているが、これは負担過重です。機構を強化する事により、各々専門的な分野で活動ができるので大きな能率が期待できます。そのためには関係指導者達を海外で研修せしめる事が必要です。4Hの先進国では必ず専門的な4H普及員をもっています。

2 篤志指導者の起用

4Hは主に低い年齢層で構成される集団であるので是非篤志指導者を必要とします。これは普及員の片腕として働く無報酬のリーダーであるが、尊い役割をもっています。4Hの発展した国では必ずこのリーダーをもっています。

3 社会の支援

4Hが十分にPRされていないという原因もあろうが社会の人々に余り認識されていないようです。また、一般の人々もこれを引立てていこうとする積極性に欠けておる感じがします。特に今後開拓すべき点は一般実業団体、農業関係営利団体、銀行などによる物心両面の援助です。米国では団体、個人を問わずこのような行為に非常に積極的です。これは金が有る無しとは別の問題で、青少年を激励し、将来の後継者をみんなで育て上げようという理念につきるのみです。僻地でクラブが育ち難いのはクラブの活動費、プロジェクト費などの欠如に起因するのがよくある事ですが、いかに自主的クラブといっても無い袖は振れません。それで教育と並行してやはり或程度の物質的な補助が必要とされます。

4 親の協力

クラブの育成に当っては親の協力が絶体的に必要です。クラブ育成を阻む要因を農業改良課の関係指導者の記録からみると親が封建的で意見をきいてくれない働く割に小使いをわずかしかくれない、二男三男を余り重視しない、経営をまかせないなどとなっていますが、親として反省させられる点が多々あります。もっと暖い目で育てたいものです。

5 その他学校4H、都市4Hなどと海外で発達して琉球に芽生えてない組織がありますが、これらは先ず農村4Hを全般的に再建してから検討してよいでしょう。郷土の4Hの発展を祈りつつ。

(古謝瑞幸)

